

琉球大学学術リポジトリ

沖縄・伊平屋村田名のウンジャミ祭祀の祭祀樹木としてのガジュマル

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農学部 公開日: 2018-04-27 キーワード (Ja): ウンジャミ祭祀, ガジュマル, 伊平屋島, 照葉樹, 竜蛇信仰 キーワード (En): religious ceremony Unjami, Ficus microcarpa L.f., Iheya-jima Island, lucidophyllous tree, dragon snake faith 作成者: 新里, 孝和, 芝, 正巳, Shinzato, Takakazu, Shiba, Masami メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/40926

沖縄・伊平屋村田名のウンジャミ祭祀の祭祀樹木としてのガジュマル

新里孝和^{1*}、芝 正巳²

¹国頭村文化財保存調査委員／沖縄県文化財保護審議会専門委員、²琉球大学農学部亜熱帯地域農学科

Ficus microcarpa L.f. as a prototypic tree used for Unjami religious service of Iheya-jima Island in Okinawa

Takakazu SHINZATO^{1*}, and Masami SHIBA²

Kunigami Village Cultural Properties Preservation Survey Member/Expert Commission Member of Cultural Properties of Okinawa Prefecture

Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus

キーワード：ウンジャミ祭祀、ガジュマル、伊平屋島、照葉樹、竜蛇信仰、

Keyword: religious ceremony Unjami, *Ficus microcarpa* L.f., Iheya-jima Island, lucidophyllous tree, dragon snake faith,

*Corresponding author(E-mail:shinri@trad.ocn.ne.jp)

沖縄のシヌグ祭祀の神人が用いる植物は、日本西南地の照葉樹林帯の祭祀植物と関連して論を進めている¹⁾。神人が頭にかぶるカブイ・カーブイ・ハブイ（冠）の材料に供する国頭村安田区^{2,3)}と奥区のゴンズイや祓いの杖のイヌガシ⁴⁾、本部町具志堅区の襟にさす枝のヤブニッケイ⁵⁾などはいずれも日本の照葉樹林で普通にみられる構成種である。本部町瀬底区の男神人の腰にさすハマイヌビワは熱帯系の樹種であるが照葉樹林帯の代表的な祭祀植物であるサカキの1/2葉序と同型のものと考えられ¹⁾、ガンシナ（鉢巻）に用いるナガバカニクサは奄美群島と共通するようである⁶⁾。

カブイや祓い枝など祭祀植物に供する植物の条件は、葉が常緑性で全縁、材料の得やすい里山に普通に産することなどである¹⁾。祭祀植物なかでも常緑樹はシバと総称し、神事の際の冠にはハブイギーと称されるシバを用いたとされ、伊平屋島でも神人の鉢巻・ガンシナに挿す木の枝は往時はガジュマルにかぎらず手近にある常緑樹を使ったであろう、と考えられている⁷⁾。かつて日本の照葉樹林域においても、サカキは常緑広葉樹の総称で祭祀用にはいろんな樹種が使われたようである^{1,8)}。土着信仰としてのシヌグやウンジャミの祭祀植物が他地域と関連するなら、また沖縄の神事そのものの性質や状況から、カブイや祓いの杖などの樹種は何らかの民俗的背景や傾向をもって使用されたものと考えられる。

琉球列島全域に生育するガジュマルは熱帯系の樹種で、九州以北の照葉樹林域には自然分布しない⁹⁾。文献でみると^{7,10)}、現在、沖縄地域においてもシヌグやウンジャミ行事でガジュマルの枝を神人のガンシナ・カブイに挿すところは伊平屋島のみのものである。伊平屋村田名区のウンジャミ祭の

カブイに使われるガジュマルについて、植物観からその背景や意義を考察してみたい。

1 伊平屋島の自然と文化材

主に伊平屋列島文化誌より¹¹⁾、伊是名島の位置や地勢、気象、動植物、行事、生業などを概観すると、伊平屋村は北緯27度～27度3分、東経127度55分～128度2分に位置し、南西から北東に長さ14km、最大幅3km¹²⁾の細長い伊平屋島（面積19.3km²、周囲長32km）と野甫島（面積3.2km²）の2島からなり、東方のほぼ同じ北緯線上に与論島や沖永良部島、やや東南から南方向に沖縄島北部の山系、本部半島を望む。伊平屋島は起伏が大きい山がちの地形をもち、山地は¹²⁾チャート（砂岩・頁岩・石灰岩・緑色岩）からなる最高峰の嘉陽山（293.9m）をはじめ200m前後の阿波岳、腰岳、阿佐岳、後岳、前岳があり、平地は住居や田畑のある田名、前泊、我喜屋区に広がり地質は砂層で、観察から主な作物は稲とサトウキビである（2017年9月）。野甫島はやや平坦地で砂質石灰岩からなる¹²⁾。

伊平屋諸島は、は虫類は無毒のアカマタ、キノボリトカゲ、有毒ヘビ類はヒメハブととくに毒性の強いハブは伊平屋島のみで伊是名島や他の島には棲息しない¹¹⁾。植物はシダ植物以上のものが伊平屋島には134科389属507種7亜種52変種3品種、野甫島には76科166属171種3亜種19変種1品種が記録されている¹¹⁾。因みに記録から、伊平屋島の山地林は日本西南の照葉樹林域における祭祀植物を代表するサカキとシキミは分布しない。

森林植生は沖縄島北部山地と同じように非石灰岩地の常緑広葉樹林でボチョウジーイタジイ（スダジイ）群団に属し、後岳や腰岳、嘉陽山などは高木層はイタジイを優占種として、イジュ、フカノキ、コバンモチなど、亜高木層はヤブツバキ、モチノキ、イスノキ、アデク、ヒメユズリハ、ツゲモチ、タブノキ、モッコク、モクダチバナなど、低木層はシンアクチ、イヌガシ、クチナシ、ヤマヒハツ、カゴノキ、ボチョウジ（リュウキュウアオキ）などが生育する^{13,14}。

これらの山地は建築材や器具材となる木も豊富であったという。貫屋是那覇や山原から材木を買い求め、島産のリュウキュウマツ材で捕捉し、穴屋は島産材で整え、いずれも茅を用いて建築した。また各部落は松材により運送船（帆船）を建造し、山地から薪木を伐り出して運送船で運んで那覇で売却した。かつての輸出物はこの薪木が主なものでその他月桃縄（ゲットウ）、黒皮縄（クロツグ）、わずかな穀物などであった¹⁵。昭和初年ころ、那覇から10人ばかりマーチチャー（松伐採人）が来たが、伐った松はほとんど薪用であった¹⁶。

年中行事は主に旧暦で行い、7月の七夕、盆祭り、シヌグ、ウンザミ・ウンジャミなどがある。七夕は盆の祖霊を迎えるための墓掃除、盆祭りは3日間であつては青年たちがエイサーの歌を歌い踊ったという。7月16日がウンザミ、16日から20日まで吉日を選んでシヌグ祭祀を行う。

田名区では¹⁵、これらの他にもたくさんの行事があり、2月2日トウトック祭り（土帝君祭り）は水の神の祭りでかつては各家から豚や山羊を持ち寄りトウトックでつぶして祝ったが、今は拝所で行いニンマーイといって古謡のテルコグチを歌う。古くは3月2日と9月の山ナジはミサキ嶽、久葉山のクバ取りの許しを願い、山への立入りが解禁され、枯木やクバなど自由に取ることができた。3月3日は浜ウリで女性は健康と結婚・子宝に恵まれることを願う、潮の干満が最も高く、女性は総出で潮干狩りに出かけ貝やタコ取りで賑わい、また網サギヤドイはシンザイノーに縄を張回し、鯛、チヌマン、イカなどの漁をし、海の漁の始まり・浜ウリと大漁の海神祭を行っていた。4月4日ターウミは野良仕事を休んで仏壇を拝み、6月15日大マチーは稲の祭りで感謝と豊年祈願をする。6月ナークチは海の行事でスク（アイゴの稚魚）が島に寄るように海の入り口を開く祭りである。

伊平屋島は山海の自然が迫りそれに沿う生業と信仰があり、自然を畏敬し神を祈り、日常茶飯の暮らしの移りがあったと思われる。それはまた琉球列島全土にいえることでもあり、その土地の存在と四方との関わりでシヌグ・ウンジャミそして祭祀植物が生まれ継承されてきたであろう。

2 ウンジャミとシヌグ祭祀

旧暦7月17日、田名区では朝からウンジャミ祭祀、我喜屋区では午後からシヌグ祭祀が行われた。2017年9月7日（木曜日）、旧盆ウークイ（旧暦7月15日）の2日後に島

のそれらの祭祀に接することができた。

田名屋（田名神社）は背後にイタジイなどが生育する亜熱帯照葉樹林が広がり、敷地は東側からノロ殿内、アサギ、神社があり、神社の前には1本のクスノハカエデが立っている（図1）。田名区のウンジャミは午前10時頃に始まり拝みが済んだ後、10時35分、白装束の5名の女神人が、アサギの前に拵えたへさきを東方に向け長さ7m幅1m高さ30cmほどの若葉色の布で囲いした舟形の内と外に立ち、長さ1.5mくらいのオー・オーダキ（ダンチク）を右手で前にかざし、前後に3回押し引きながらヘーシ（囃子）を唱える（図2）。田名区在の民俗・芸能保存の活動家・西銘仁正氏（昭和22年生）によると、舟形での女神人たちのヘーシには特定された文句はなく、動きは舟を漕ぐ仕種だという。



図1 田名屋・田名神社と亜熱帯照葉樹林



図2 オーをかざして囃子を唱える女神人

女神人は着物の上から白衣をはおり、頭は白いサージで髪をすっぽりと包むように被り、その上にガジュマルの葉付きの小枝をさした稲藁のガンシナ（鉢巻）を巻く（図3）。田名屋からマジキナヌハンタへ向かい、男神人を先頭に女神人5名が歩いて行く。6名はそれぞれオーを持っているが、持ちは左右どちらでもいいようである、女神人は縦列の先の2名はガンシナをしているが後方の3名は白いサージだけである。



図3 ウガンシナ（冠）を被る女神人



図5 アハシ海岸の岩で東方に向かって祈る



図4 女神人はマジキナヌハンタで2列になり東方に向かって祈る

10時43分、マジキナヌハンタ（通称ハナヒチ）で5名の女神人は、ガンシナをした2名が前列に白いサージのみの3名が後列の2列に並んで、東方に向かって祈る（図4）。その儀式が済むと、時間を決め車に乗って海岸に行く。責任者が時間を間違えたようで、西銘氏の車でアハシ海岸のナートゥンチビ（田名川の河口でかつての港という）に着いた時には、拝所へ向かっての拝みはすでに済んでいた。11時20分頃、女神人たちは波打ち際にある弧岩に立ち、オーを海に投げ、マジキナヌハンタと同じように2列に並び海洋の東方に向かって祈り、トーシンドーイ（唐船ドーイ）を歌って、11時40分頃午前の行事が終了する（図5）。

昭和60年（1985年）頃までは¹⁶⁾、女神人は全員馬に乗り、男衆が馬の手綱を引いてアハシの浜に行ったという。今は乗馬はなく、その鞍や馬具はウンジャミ行事の日に田名屋の前に陳列されている。オーは喜界島に向けて流すというが、ガンシナは任意に捨て去るようである。ウンジャミは「昔、喜界島のノロが首里に行く途中台風で伊平屋に避難した際、島のノロと知り合いになり、そして17日に島を発つとき見送った時の祭りである。」¹⁵⁾とされているが、内容はほぼ同じように、喜界島のノロの船が首里からの帰途難破し

たとき、そのノロを救助し、介抱して厚くもてなし、喜界島へ送り返したことに由来する^{11,16)}ともいい、島の人に聞くと、喜界島から馬を持ってきた人を見送ったという話もある。いずれも喜界島と関係している。

田名村の「テルコロ」の歌詞の中には「奥の子は土やり、てるくみが初むなるくみがのたて、鬼塚からど初め、鬼塚からどのたて、鬼塚の島ゆより、金の島ちよろち、田名の子が掛け島、田名の子が得々島」がある¹⁹⁾。テルコグチは喜界島ノロの置土産歌で、アハシ海岸は喜界から首里の往復寄港に利用したに違いないという¹¹⁾。田名ウンジャミの由来が、眺望のきく与論島や沖永良部島ではなく、なぜ奄美群島で伊平屋島から遠い喜界島であるか、課題であろう。また女神人は、アハシの岩からオーの茎葉を東方の海に向けて流すが、その意味も不明である。

田名ウンジャミの喜界ノロの話は後に付会したものであろうとされ¹⁶⁾、さらに国頭村安田のシヌグには北山落城の難を逃れた「ウファーさとぬし」によって組まれたとの話があり¹⁷⁾、浜比嘉島のシヌグの起こりにも南山の武士平良忠臣とその仲間が中山との敗戦で逃れてきたので、彼らの身を護ったという話がある¹⁸⁾。シヌグ・ウンジャミ祭事はかつて琉球列島の各村に広く分布していたと思われるが^{20,21)}、王府時代に行事の内容が淫祀として禁止され²²⁾、役人の目に付きやすい村落では廃れ、通路が不便で王府視察の行き届き難い山原の山間地や周辺の島の村落の、辺境の地で土着信仰として伝承されてきたのではないかと考えられる。とくに、尚真王（1477年～1526年）は聞得大君を頂点とする宗教組織をととのえ²³⁾、その時代はシヌグ・ウンジャミ祭事の監視が厳しかったに違いない。祭祀の由来が後に付会されたものとすれば、王府から土着信仰を護りぬこうとする村落民の知恵であったのだろう。

田名ウンジャミは午後から他の行事と「テルコグチ」の歌があるということであったが、午後は我喜屋区のシヌグを視察した。我喜屋村落はやや西縁にシヌグモーがあり、その西側は広い田園地で、さらに西方には賀陽山に連なる山並がある。シヌグモーは周りが高さ1m弱のサンゴの石垣で囲ま

れ、その内側には間をおいてイヌマキ、リュウキュウコクタン、モクマオウ、ヒカンザクラ、キダチベニノウゼンなどが植えられ、モーの東側の気根の垂下したガジュマルの樹下に祠が据えてある(図6)。シヌグ祭事のその日は、草がきれいに刈られて、祠の前に大きなブルーシートその上にゴザが敷かれている。



図6 我喜屋区シヌグモーの祠とガジュマル

午後5時30分、シヌグモーに区民が集まり始め、シートに腰を下ろし、ゴザの上に供え物が並べられ、5時40分前後に祠の前に膳にのせた供物と島線香を捧げお祈りする。供物は七品で、魚(イラブチャー; ブダイ類)の揚物ほかである。祈願する男性は神人ではなく、区の代表人であるという。この1年間(昨年のシヌグ祭後)に生まれた男児のこれまでの健康に感謝し、これからの艱難辛苦を凌ぎ、立派な大人に育っていくことを祈願するという。今日は平成29年2月生の男児1名で、シヌグに参列した夫婦は島外に住み、母親が抱いたまま、神役から祠に捧げた米と酒を子にいただく(図7)。その後、供物を参列者に分配し、食しながら、祠の前では三線(男3名)・太鼓(男1名)によって3曲、カジヤデ風、アヤカリ節、揚作田節、が奏され、余興に入って祝節、参加者のカチャーシが演じられ、祝儀者の報告で終了となる(図8)。夕方6時過ぎ、暗くなりかけたころ、一斉



図7 1年以内に生まれた男児の顔に酒をなでる



図8 シヌグモーで歌・三線を捧げる

に北方にあるヌル^{ドゥンチ}殿内に急ぎ移動する。6時18分、シヌグモーとほぼ同じように島線香をかざし、男児と同じように女兒の祈願をする。区長と男性一人が指で、母親の抱いた女兒の額に酒と塩をつける。女兒は3名で、平成29年1月・2月・5月生である。

殿内には、おかゆが捧げられ、供花にマサキ、6筋のシマウッコウ(黒色の平線香)が飾られる。線香は1本半(9筋)、マサキは枝葉の持ちがいいから使うといい、方言名はタバクウンギ、田名区ではタマトクヌフンギ(西銘氏; クヌフはミカンの意で葉が似ているからという)と呼び、他にイヌマキ、クロトンも使うようである。歌や踊りの後、夕刻7時のうす暗い中、区長が祭事の終了を宣言し解散する。

我喜屋シヌグは神人がおらずガンシナもない。ここでは田名ウンジャミの女神人が白いサージの上に巻く、ウガンシナと呼ばれる稲藁の鉢巻にさすガジュマルについて思索してみたい。

3 ウガンシナのガジュマル

田名ウンジャミに行く前に、我喜屋区の前里源徳氏(昭和19年生)に案内されて伊平屋小学校の校庭に立つ大きな広い樹冠をもつガジュマルを見る。ガジュマルは、樹高が7~8m、樹冠の広さが400㎡くらい、四方の枝は木材支柱で支えられるほど伸び、大事にされ、校舎改築の位置を変更して保存に努めているそうで、村人の強い思い入れが知れる(図9)。シヌグモーの祠も、垂下する気根が絡み合って太い幹となったガジュマルの樹陰下であり、聖域の情景が漂う。中国の史書『隋書』の「琉求国」に関する記事に「ガジュマルが多く、葉が密生し、条織は髪のように下垂する」と記述されているという²³⁾。七世紀頃のグスク時代へ移行しようとする古代にも、ガジュマルは沖縄の日常の風景であつたらしい。

ガジュマルは琉球列島に広く分布する。ガジュマルは各島の沿岸や低地の琉球石灰岩地に多く自生し、防潮防風林、また公民館など公共の広場や屋敷や街路の緑陰、風景樹として植栽され、とくに神アサギや御嶽やグスクなどの神聖な場所



図9 校舎改築中の伊平屋小学校の校庭に生育する傘型樹冠のガジュマル

によく生育し、荘厳な樹容は木の精霊キジムナー（キジムン、ブナガヤ、セーマ、アカカナジャー¹⁵⁾の住む樹として畏敬の念を抱かせる。亜熱帯性照葉樹のガジュマルは、村人にとって最も身近な親しみのある樹種の一つで、葉は全縁で、祭具植物の条件に適うといえよう¹⁾。

女神人5名のうち2名がガンシナ（鉢巻）のカブイを白いサージの上にかぶる。ガンシナは稲藁で縄を編んで作り、それに長さ約10cm、2、3枚から10枚ほどの葉をつけたガジュマルの枝、5-8本を挿し、紐や輪ゴム、セロテープなどで固定する（図10）。西銘氏の妻・西銘美枝氏（旧姓諸見）の話によると、美枝氏の祖母（伊礼姓）は15、6歳頃からノロをやっている、美枝氏は小さい頃からその祖母に付いて祭事を見聞していたが、祖母はガジュマルの枝を挿した稲藁の鉢巻（通称カブイ・ハブイ）をウガンシナと呼び、ガジュマルの枝は奇数の7本で、左巻きに枝を挿していたという。国頭村安田区のシヌグのカブイの稲藁のガンシナは、作っている高齢の村人の説明では、田名区と同じように縄の編み方はヒジャイノーイ（左編み）である（2017年8月28日・旧暦7月7日亥の日見聞）。

ガジュマルは、伊平屋村ではガジマン（国吉 修氏、昭和



図10 稲藁の鉢巻にガジュマルの枝を挿したウガンシナ

23年生）と呼ぶが、琉球列島における方言名は多く^{24,25)}、○奄美諸島；ガジマル・カヅマル・ガズマル・ガジュマル（奄美）、アマボーイ（宇検）、ガジマラ（三方、名瀬）、ヨージュ（大和）、ガトゥマル（古仁屋、瀬戸内）、ケモンギ（竜郷、名瀬）、ガジマラー（喜界）、ウシク（徳之島）、チンパ（徳之島）、ツンパ（伊仙）、ツバラギ（永良部）、ブイギ（与論；気根）、○沖縄諸島；ガジマル（沖縄）、ガジマン（安田、首里、座間味）、ガズマール（国頭）、○宮古諸島；ガザマギー（宮古）、ガツパナキ（狩俣、伊良部）、ガギヤマレ・カクマラギー・ガジニマキー（大神）、ガジマギー（宮古、多良間）、ガズマ（多良間）、○八重山諸島；ガツマレ・ガツムレー・ガザムネ・ガザムネー・ガザムレー（石垣）、ガザミ（白保）、ガズブネ（平久保）、ガツパネ（川平）、ガジツプニ・ガジョーネー・ガジョーニ・ガゾネ（竹富）、ガジマリィ（黒島）、ガジィマーローキー（新城）、ガチパナキ（西表）、ガザマニ・ガズマレーキ・ガツマニキ（波照間）、サガイ（与那国）、また○ガズマル（琉球語便覧、沖縄志）、ガツマル（沖縄対話）、カヅマル（琉歌・南島八重垣）、ガツマロ（琉球国由来記）、がある。ガジュマルの方言名は、奄美諸島のアマボーイ、チンパ・ツンパ、ツバラギなどがあるが、全般的にはガジマルの名前やその樹形に結びつくものと考えられる。

ガジュマル（*Ficus microcarpa* L.f.^{9,26,27)}, *F. retusa* L.^{28,29,30)}は⁹⁾、屋久島、種子島を北限にして、琉球列島、台湾、熱帯アジア（印度・馬來・比律賓^{27,29,30)}中国^{26,27,28)}；広西・広東・福建・浙江南部・雲南和貴州）、オーストラリアに分布する。ガジュマルの各国の名前には²⁸⁾、Chinese Banyan²⁷⁾、Indian Laurel；Stumpflatteriger Feigenbaum；Kamrup, Zir, Butisa, Sunumjon, Jiri, Jamu, Situyok, Nandruk, Yerrajuvi, Nandireka, Pilala, Pinval（インド）、タイワンマツ、コバゴム、榕樹^{26,27,30)}、正榕^{27,29,30)}、松仔、松榕、鳥松^{27,30)}、根樹、がある。その他、India Laurel Fig^{27,30)}、Malay Banyan²⁷⁾、Marabutan³⁰⁾、Yongshuh³⁰⁾、ジャラジャップ²⁹⁾、榕²⁹⁾、細葉榕²⁶⁾、がある。

Chinese Banyanの名称は、ガジュマルと同じクワ科（*Moraceae*）イチジク属（*Ficus*）に属し、常緑高木種で多数の気根を発生して樹冠を広げるなど、バンヤンジュ・パニヤン、Vanda Treeと呼ばれるベンガルボダイジュ（*Ficus bengalensis* L.）³¹⁾と樹の様子が似ていることによるだろう。ベンガルボダイジュは、その木の下で釈迦が悟りを開いたインドボダイジュ（*Ficus religiosa* L.；Bo-Tree、Bo-chi Tree、Peepul、Peepul、菩提樹、印度菩提樹）とともに、インドでは仏教以前の古くから聖樹として崇拝されてきたという³¹⁾。沖縄に生育するガジュマルには、英名で Small-Leaved Banyan³³⁾、Liukiu Banyan Tree（リュウキュウバンヤン）³⁴⁾がある。

漢名の榕（樹）は、ガジュマルのことでアコウ（*Ficus superiba*(Miq.) Miq. var. *japonica* Miq.⁹⁾、*Ficus wightiana* Wall.²⁶⁾）ではないとされるが^{28,32)}、アコウの漢名には他に

筆管榕・筆管樹・雀榕²⁶⁾、また赤榕・鳥榕・山榕・紅肉榕・鳥尿榕(臺)・筆管樹(瓊)^{27,30)}、がある。

4 祭祀植物ガジュマル

ガジュマルは「気根を下垂し幹枝は縦横に入り交り所謂「榕橋」をなし、・・・台湾ではこの葉を榭の代用として神前へ捧げる、高雄市広済宮祇境内にあるガジュマルは康熙五十年同宮創建と同時に植えたもの、毎年三月、九月の例祭にはこの樹に対して焼香し合掌礼拝し、その葉をつみ取り子女の肩に赤糸で結ぶとその子女が丈夫に育つといわれ、土民はこの社を松樹公と称し尊崇している」という²⁸⁾。サカキ(*Cleyera japonica* Thunb.^{9,30)}、*Sakakia ochracea* Nakai²⁹⁾)は、台湾に産し、その枝葉は挿花、玉串に用いられるとされ²⁹⁾、ガジュマルの枝葉も祭祀樹種として同様に認容されているのであろう。

伊波普猷によると³⁵⁾、安南(中国などがベトナム中部を呼称した旧名)でも榕樹をガジュマルと呼ぶことを聞き、名前の一致から、日本民族を形成する一分子がかつてインドネシアを経過したのではないかと考えられている。さらに、琉球ではガズマルは神木で巫女は手草としてこの枝を持ち、毎月朔と15日に祖神および火の神に手向け、台湾の阿里山村落でも神木としてその枝葉で祭祀をすることから、日本民族の北進の証拠とする。また与論島では²¹⁾、シヌグ祭の旧暦7月16日の前夜祭には祭場である「サアクラでの神体は東方の自然の樹木と石で、その前に三方を置き、その上にガジュマルの小枝を立て、飯椀に水を盛って竹葉を浮かべる」という。

神女が祭祀で草冠(ウガンシナ・カブイ)を被るのは神の化身で、神に対しては神女として仕え、村人に対しては神として立ち向かう構図となるが、草冠の材料には生命力の強い植物、リュウキュウボタンヅル、クロツグ、ピロウ、ガジュマルなどがあり、それらの特定の植物には霊力が宿る、と考えられている¹⁰⁾。ガジュマルは、葉序は互生であるが、常緑高木性、葉は全縁で、強い生命力をもち、霊力が宿るとする祭祀樹種への思いは、さらにその樹体の特異性にあると考えられる。

ガジュマルの大きな特徴は、他の木の樹上や岩石・石垣などに運ばれた種子が発芽成長して気根を発生し、それが大きく成長して宿主樹木を絞殺する、さらに垂下して地面に達した気根は根となり幹となって広がり、超大な樹冠を形づくる、これが榕樹、Chinese Banyan、Malay Banyan、Liukiu Banyan Tree と称される所以だろう。

インドボダイジュは、サンスクリットでアシュパッタあるいはピッパラと呼ばれ、崇拜される一つに、敵を調伏する呪術のための腕輪や杭に用いられたが、これはアシュパッタが寄生木となって他の木を滅ぼす事実によっているという³¹⁾。漢字の「容」は、入れること、盛ること、すがた、かたち、聞き入れること、受け入れること、許すことである³⁶⁾。

「榕」は木に容で、榕樹はつまり大木となってよく茂り、夏の暑いころには木の下に多数の人を収容できる意味だという³⁷⁾。また岩石や石垣に発芽したガジュマルの気根は、それらのものを抱くように、守護するように、受け容れるようにして、傘型に大きく成長し Banyan となる。

榕樹・ガジュマルは、荘厳で精霊樹としてキジムナー(田名方言名;アカカナジャー)を宿し、我喜屋区のシヌグモーや沖縄の各村落の御嶽や拝所などの象徴となり、民衆を抱き入れる庇陰樹となり、聖樹・神木および祭祀樹種の因になりうるといえよう。

気根にはもう一つ思い入れがある。気根は、樹上より空中を垂下するすがたや、他物にまた互いに縦横に絡み合うかたちをみせる。長い垂下根の風の揺らぎのすがた、互いに絡み合うかたちは、蛇類・ハブの生態を連想させるものがあると思案する(図11、12)。日本原始の祭りは³⁸⁾、神蛇と、これを齋き祀る女性蛇巫を中心に展開し、女性蛇巫が神蛇と交わり、神蛇を生み、現実には蛇を捕え飼養し祀ることであったが、それは不可能なため、蛇に見立てられる山の神、蛇の身体に相似する樹木や石柱などの代用神・代用物と交合の擬きをするようになったとされる。人と蛇の関係は先史時代まで遡り³⁹⁾、縄文中期の土器には蛇の意匠の見られるものがあるといい、また蛇の古語はナガ、ナギ、ナミなどがあるが、イザナギ、イザナミは蛇神であったと考えられるという。

琉球列島には蛇・ハブに対する民話・逸話が多く^{40,41,42)}、



図11 樹上を垂下する気根(沖縄市)



図12 気根の絡まり(沖縄市)

蛇・ハブは恐れもあるが、信仰への根底には、畏敬があり、神意として捉えられるからであろう。しばらく前の沖縄の呪術的伝承社会では⁴³⁾、森の中からハブの鳴声が聞こると、祖母は「アヤマダラ、マダラ。ヤマヌウルチヌ」（綾まだら、まだら。山の大蛇の）と、蛇の美しさを讃え、それからハブ除けの呪文を唱えたといい、古代神話の世界の沖縄人は、蛇・ハブの紋様を、美しい着物を意味する「アヤマダラ」「あやもどろ」と称し、日の出の壮観さは「あけもどろ」「あけもどろのはな」と連想し、天空にかかる美しい虹は宮古では「ティン・パウ」（天の蛇）、沖縄島では蛇と同根の語ヌージ、ノージと呼んだという。本部町渡久地区でもノーギリ（虹）の語がある。

絡み合いは、巫女ではないが、伊平屋村田名区の旧暦7月19日のシヌグ祭では、かつて、平らな石に小さな女陰の形をした穴があり、年少の少年らがそれに乗せられ性的な仕事をさせられたといい¹⁶⁾、本部町伊野波区シヌグイの旧暦7月25日のムックジャは若い男2人が演じ、カブイは男役はピロウの葉をトウツルモドキで結び、女役はトウツルモドキのみで、クロツグを身にまといピロウの葉の扇をもち、二人は抱き合い交接の様を演じる^{1,22)}。伊平屋村の民話にも⁴⁴⁾、「留守番ハブ」「蛇の食い方」「字を書くアカマター」など多くあり、「アカマター」（野甫区、儀間カメ）には“浜に行つて、あとアカマターの子生んだのでしょ、浜下りしないと、アカマターん子生むむという話”がある。沖縄は毒蛇ハブや大型のアカマタ、サキシマスジオなど蛇類が多く生息し、その生態は血縁・部族の存続を祈る土着信仰との関係があるものと思われる。

蛇信仰から³⁸⁾、神祭において巫女は、縄文時代は蛇そのものを直接頭上に巻き付けて邪神であることを誇示し、弥生・古墳時代は間接的に蛇を紋様にしたタスキ・帯・裳などを身にまとい、それから神蛇に見立てられた樹木への変遷が考えられている。とくにピロウは重要で、八重山竹富島では神事の際にその葉の束をピロウの幹に縛りつけ、その団扇を使い、石垣市川平では青年らがその蓑に身を隠して神に扮する、とある。そして宮古島島尻の祖神祭では、里へ下りてくる神女たちは、蛇を象徴する丸い木の葉の被りものをかぶり、腰にはピロウの葉の繊維を巻くが、腰の繊維は神羽と呼ばれ、腰蓑の変化したものとみなされている。類推すると、神女たちが頭にする木の葉の被りものが、今日のシヌグとウンジャミ祭祀の草冠・カブイ・ハブイで、田名ウンジャミのウガンシナにはハブに所以する霊力の高いガジュマルの枝葉を挿すのであろう。

今一つ、ガジュマルは幹や枝や葉を傷つけると、イチジク属 (*Ficus*) のベンガルボダイジュやインドボダイジュや同属の他の木と同じように白い乳液が出る^{9,31)}。その乳液は³¹⁾、ベンガルボダイジュが薬用、イチジク (*F. carica* L.) がフィシンとよぶたんぱく質分解酵素を含み痔の塗布薬になる。沖縄では、ガジュマルの樹皮を傷つけて出る乳液でチューインガムを作って噛んで遊んだ⁴⁵⁾。民俗で関心の高いこの

白い乳液は、信仰に関する記述は見あたらないが、子を育てる母乳につながり、血縁・部族の永続を祈るシヌグ・ウンジャミ神事の祭祀樹木に用いられる要因の一つになったのではないかと考えられる。照葉樹林帯の祭祀植物として、ガジュマルは常緑・全縁・身近の普遍的な樹種であり、気根をもつ特質は熱帯アジアのバニヤンとなり、蛇信仰につながり、乳液はさらにその意義を高揚するものであろう。

帽蛇（コブラ）はインドでは神視した蛇遣いの芸を観せるが、古エジプトでも神視されて見世物に使われ、帽蛇は今も梵名那伽で漢訳仏典の竜であるという⁴⁶⁾。上田は⁴⁷⁾、竜蛇信仰はインドの民間に発祥発達し、中国大陸へ伝わり、日本へもたらされ、荒神・竜神となって普及するに至り、出雲の国ではさらに神佐（有）祭と海蛇の結びつきがあったと考えられている。そして出雲地方では南海の海蛇セグロウミヘビが、神有祭のときに定期的に海の彼方からやってくる出会いに気づき、海蛇を神の使いとして信仰するこの先祖は南方暖海の国の佳人であったろう、とする。南の台湾において³⁸⁾、山地族の一つパイワン族の頭目家のシンボルは百歩蛇という毒蛇で、これを伝世家紋として人体像に刻み、家屋の入り口・柱・軒に彫刻し、蛇紋を衣服に美しく刺繍するという。

沖縄においては、湧上によると⁴³⁾、宮古狩俣では「祖神の神歌」の「山のふーすらい（妖怪変化よ）、青柴の真主よ」とあるのは大蛇すなわち部落始祖の神、伊良部島には「オコパウ（大蛇）の主」という昔話があり、八重山諸島でも赤蛇（先島ハブ）は神、青蛇（青大将）は水神で、祖神だともいわれ、川平村の群星御嶽の近くの祭祀遺跡「ナコースク、ガズバネーガマ」（仲底の大ガジュマルさんの意、仲間大ガジュマルともいう）は、現在松の木になっているが、200年ほど前までは節の祭りの「カンターアシビ（神た一遊び）」（神遊びとも）の神事に、円座の村の神女たちの手のひらにマーハブ（先島ハブ）をリレー式に送る神判が行われたらしい。田名区ではハブは吉、神事の知らせであるという¹⁵⁾。

伊波は³⁵⁾、ガジュマルはインド・インドシナ・中国南部の熱帯地域に分布し、安南と名称が一致することや、台湾阿里山では神木で祭りにその木葉を使うことから、台湾研究者の尾崎秀真氏の唱える「日本で御祭りの時に榊を捧げるのは、とりも直さず日本民族が北進した証拠で、大和島根に落付いた後、この逆さに枝の生える榕樹がなかったの、雑木の中からそれに似通ったものを伐って来て、之をサカキと名づけ、紙のようなものを下げて、榕樹の代用をさせた」の説に傾聴し、ガジュマルの単語に興味を示す。黒潮文化・海上の道の語は久しいが、既述したように、ガジュマルの自然分布および民間信仰と竜蛇信仰の歴史などから、赤道の北側を東から西へ流れてルソン島沖を北進し、屋久島の西で対馬海流に分流する黒潮は⁴⁸⁾、琉球列島また日本の照葉樹林帯の土着信仰の発生・変遷の基層にあって、神事のハブイ・草冠・ウガンシナまたサカキなどもその影響のもとにあるのではないかと推察される。

一方、田名区には旧暦6月ナークチという海の行事があり、スク（アイゴの稚魚）が島に寄るように海の入り口を開くための祭りで、青年たちがカズラズナを引き、中にスクになる子供たちが入り捕らえられる真似をするという¹⁵⁾。今帰仁村今泊の海神祭でも大正の初めまでは同じような仕草をしたという⁴⁹⁾。アイゴは太平洋・インド洋の熱帯域に広く分布し、本州中部付近に及び、スクは旧暦5月下旬～6月下旬の大潮（1日、15日）にのって沖合からサンゴ礁域に群れをなして押し寄せてくる⁵⁰⁾。大潮の頃は夏の海水温が上昇し、黒潮の北進の流れにのってやってくるカツオが沖縄近海に滞留する時期で⁵¹⁾、6月ナークチはスクや黒潮の他の魚類とともに、魚を供え物にするシヌグ・ウンジャミ祭祀と関連しないか、祭祀植物研究の複合課題となる気がする。

さらに、まだ薄明にもならない段階であるが、竜蛇信仰で蛇類を崇める大きな生態的特徴に「脱皮」、すなわち生まれ変わり、再生・蘇生の思想があり^{38,39,41,46)}、脱皮は沖縄で「スディル、スディーン、スディユン」といい、この語がガジュマルの気根・榕樹と関係しないか、気になっているところである。ガジュマルは気根の垂下によって、幹を増やして林立し、樹冠を広げる、古人にその様態は生命が再生を繰り返していくように認識されても不思議はないだろう。

気根の垂下は蛇・ハブの脱皮・スディルと共通の再生観念と考えられ、スディルことによって子々孫々が持続、発展することになるといえる。他方、伊江島方言で⁵²⁾「集まり」は「スリー」、「集まる」「アツィマユン、スルユン」、「集める」「アツィミユン、ヌチュン」で、「たくさん」は「ガンディ、ガズィディ、キータカ、グズィディ」、「多くなる」は「ガズィニユン、ウブサナユン」などで、「集まり、集まる」は本部町渡久地区では「ガジマレー、ガジマイ」と言い伊平屋島では「フリー」である。ガジュマルおよび漢名の榕樹は、気根によって脱皮・再生そして樹下に多数の人を収容することから、スディル・スディユン→フリー・スリー・スルユン・ガンディ・ガズィニユン・ガジマレー・ガジマイ→ガジマル・ガジマン・ガツマレ・ガツムレー・ガザムネ→ガジュマル、などのように関連しないか、これらが南方の語と結びつかないか、言語に疎い仕業であっても離れられないでいる。

今回の調査は、高等学校の同期で島の農業委員会委員；前里源徳氏、および島のNPO法人げんき村・民族芸能保存会事務局長；西銘仁正氏・美枝氏には区域の案内や祭事に関するご教示、その他一切のお世話をいただいた。田名区の女神人や区民および我喜屋区の祭主や区民の皆さまには祭事の際に身内の厚遇を受け、聞き取り調査のご協力だけでなく供え物もいただいた。うるま市立中央図書館には文献調査にご助力いただいた。これらの方々に深く感謝したい。

引用文献

- 1) 新里孝和「沖縄シヌグ神祭の植物観」2013年、名護博物館紀要あじまあ、17、p41-64、沖縄
- 2) 新里孝和・芝 正巳「沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ（Ⅰ）」2014年、琉球大学農学部学術報告、第61号、55-66
- 3) 新里孝和・芝 正巳「沖縄・国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ（Ⅱ）」2014年、琉球大学農学部学術報告、第61号、67-78
- 4) 新里孝和・芝 正巳「沖縄・国頭村奥シヌグの祭祀植物イヌガシ」2014年、琉球大学農学部学術報告、第61号、79-86
- 5) 新里孝和・芝 正巳「沖縄・本部町シヌグ、亜対生葉をもつ祭祀植物ヤブニッケイの意義」2016年、琉球大学農学部学術報告、第62号、77-86
- 6) 新里孝和・芝 正巳「沖縄・うるま市、浜比嘉島のシヌグ植物のナガバカニクサ小論」2016年、琉球大学農学部学術報告、第63号、77-87
- 7) 多和田真淳「はぶいの植物学」1974年、えとのす；1
- 8) 足田輝一「樹の文化誌」1985年、朝日選書
- 9) 初島住彦「琉球植物誌（追加・訂正版）」1975年、沖縄生物教育研究会、沖縄
- 10) 新垣則子・佐藤宣子・本永 清「沖縄の祭具—草冠」2016年、沖縄県文化財調査報告書151集—沖縄の信仰用具に関する総合調査事業、沖縄県教育庁文化財課・沖縄県教育委員会、p204-234
- 11) 仲田清英：編「伊平屋列島文化誌」1974年、発行：仲田清英、沖縄
- 12) 木崎甲子郎：編「琉球弧の地質誌」1985年、沖縄タイムス社、p85-88、沖縄
- 13) 新納義馬「沖縄の植物自然」1977年、沖縄県のすぐれた自然、沖縄県環境保健部自然保護課、p1-56、沖縄
- 14) 新納義馬「伊平屋島の山地のスタジイ林」1988年、日本の重要な植物群落Ⅱ沖縄県版、p189-191
- 15) 伊平屋村田名公民館建築記念事業期成会「伊平屋村田名字史」2003年、発行：西銘仁正（公民館内）、沖縄
- 16) 上江洲 均「伊平屋島民俗散歩」1986年、ひるぎ社、沖縄
- 17) 宮城定盛「国頭村安田のシヌグ考」1976年、安田古文化財保存会、沖縄
- 18) 比嘉小学校「浜比嘉島の年中行事と伝説」「神の島浜比嘉島の話」1986年、勝連町立比嘉小学校、沖縄
- 19) 新垣平八・諸見清吉「伊平屋村誌」1956年、伊平屋村役所、沖縄
- 20) 小野重朗「奄美民俗文化の研究」1982年、財団法人法政大学出版局、
- 21) 高橋誠一・竹 盛彦「与論島—琉球の原風景が残る島—」2005年、株式会社ナカニシヤ出版、

- 22) 仲田善明「本部のシヌグ」2003年、沖縄学研究所
- 23) 外間守善「沖縄の歴史と文化」1987年、中央公論社、
- 24) 天野鉄夫「琉球列島植物方言集」1979年、新星図書出版、沖縄
- 25) 大野隼夫「奄美群島植物方言集」1995年、財団法人奄美文化財団、鹿児島
- 26) 中国科学院植物研究所「中国高等植物図鑑、第一冊」1972年、科学出版社、中国
- 27) 呂福原・歐辰雄・呂金誠：編著「臺灣樹木解説（三）」中華民國88年（1999年）、行政院農業委員會、中華民國
- 28) 上原敬二「樹木大図説Ⅰ」1981年（第9刷）、有明書房、
- 29) 金平亮三「臺灣樹木誌」1973年（復刻版）、合資会社井上書店、
- 30) 劉業經「国立中興大学農学院叢書第六號、臺灣木本植物誌」1972年、国立中興大学農学院出版委員會、
- 31) 岡本素治・松井 仁・高林成年・星川清親・堀田 満・緒方 健・高橋 明・上条一昭・荒木成子「イチジク属」（代表；堀田 満「世界有用植物事典」）1991年、株式会社平凡社、
- 32) 牧野富太郎「牧野新日本植物圖鑑」1968年（第17版）、株式会社北隆館、
- 33) Walker E.H. 「Flora of Okinawa and the Southern Ryukyu Islands」1976, Smithsonian Institution Press, Washington, D.C.
- 34) 古居智子「Wilson in Okinawa—ウィルソン 沖縄の旅1917—」2017年、琉球新報社、沖縄
- 35) 伊波普猷「日本文学の傍系としての琉球文学」（服部史郎・仲宗根政善・外間守善：編集「伊波普猷全集第九巻」）1975年、株式会社平凡社、
- 36) 尚学図書：編集「言泉」1986年、株式会社小学館、
- 37) 初島住彦「がじゅまる」（週刊朝日百科世界の植物、通巻80号）1977年、朝日新聞社
- 38) 吉野裕子「蛇—日本の蛇信仰」2002年（第7刷）、株式会社講談社、
- 39) 谷川健一「蛇（ハブ）の民俗一序」（谷川健一：編集「日本民俗文化資料集成 第二十巻—蛇（ハブ）の民俗」）1998年、株式会社三一書房、
- 40) 高良鉄夫「ハブ=反鼻蛇—恐るべき毒ヘビの全貌—」（谷川健一：編集「日本民俗文化資料集成 第二十巻—蛇（ハブ）の民俗」）1998年、株式会社三一書房、
- 41) 中村喬次「ハブに関する民俗的考察」（谷川健一：編集「日本民俗文化資料集成 第二十巻—蛇（ハブ）の民俗」）1998年、株式会社三一書房、
- 42) 山下欣一「第二十巻蛇（ハブ）の民俗—解説」（谷川健一：編集「日本民俗文化資料集成 第二十巻—蛇（ハブ）の民俗」）1998年、株式会社三一書房、
- 43) 湧上元雄「沖縄民俗文化論—祭祀・信仰・御嶽」2000年、榕樹書林、沖縄
- 44) 遠藤庄治：編集「伊平屋村民話集」2001年、伊平屋村教育委員会、沖縄
- 45) 名護市史編さん委員会「名護市史本編・9 民俗Ⅱ 自然の文化誌」2001年、名護市役所、沖縄
- 46) 南方熊楠「十二支考（上）」（「蛇に関する民俗と伝説」）2009年（第21刷）、岩波書店、
- 47) 上田常一「山陰特有の民俗—竜蛇さんのすべて」（谷川健一：編集「日本民俗文化資料集成 第二十巻—蛇（ハブ）の民俗」）1998年、株式会社三一書房、
- 48) 伊志嶺安進「黒潮」（沖縄大百科事典 上巻）1983年、沖縄タイムス社、沖縄、
- 49) 平敷令治「沖縄の祭祀と信仰」1990年、第一書房、
- 50) 西島信昇「アイゴ（エー、エーグラー）」（沖縄大百科事典 上巻）1983年、沖縄タイムス社、沖縄、
- 51) 伊佐次郎「カツオ（鰹）」（沖縄大百科事典 上巻）1983年、沖縄タイムス社、沖縄、
- 52) 生塩睦子「沖縄伊江島方言辞典」1999年、伊江村教育委員会、沖縄